

戦国時代には、水野氏の一族である常滑水野氏が、海産物を織田信長に贈っていたことが知られています^{*1}。鯨や蛸、海鼠腸などの海産物が贈答品として利用されていました。このうち鯨は信長から朝廷に献上され、公家に分け与えられたことがさまざまな文献などで確認できます。

また、当時の人々が書き残した日記の原本として知られる深溝松平家の『家忠日記』^{*2}によると、天正15年（1587）と18年の正月、緒川の水野氏から家忠に初鯨が贈答品として贈られています。初鯨とはその年の初めに捕れた鯨のことであり、家忠の妻は緒川水野忠分の娘であったため、水野氏との間では日常的に海産物などの品々を贈り合っていました。詳細は、当館令和4年度企画展「深溝松平家展」図録をご覧ください。

*1…出典：常滑水野家文書（とこなめ陶の森蔵）

*2…原本：駒澤大学図書館蔵

同じ頃、刈谷城主の水野信元が城下で塩をたかせていたことが分かります^{*3}。江戸時代になっても海に面した地域の一部では小規模ながら製塩が行われ、塩を年貢として納めていたことが年貢割付状（免状）から確認できます（資料1）。

また、刈谷城は舟がつけられるようになっています（資料2）。そこからすぐ南側には市原港があり、荷揚げ地となっていました。江戸時代の衣ヶ浦は浅瀬で魚が捕れ、白魚の漁が行われていました^{*4}。ただし、衣ヶ浦は次第に土砂が堆積して縮小していったため、城の付近にも河川が広がっていきます（資料3）。この影響もあって港としては南の伊勢湾に近い吉浜や高浜が栄えました。

*3…出典：富士見道記（連歌師里村紹巴）

*4…出典：刈谷町庄屋留帳、三洲刈谷領之図（島原本光寺所蔵）



資料2 刈谷城絵図（当館蔵）



資料2 [北を上にして拡大]



資料3 海岸之図の一部（当館寄託）

歴史博物館には「江戸より長崎・五島まで海路図」という、江戸から長崎までの道程が描かれた珍しい絵図があります。全国に類似の絵図がいくつも存在していますが、その多くは大名の参勤交代の経路が意識され、江戸から大坂までは陸路の東海道、大坂から九州までは海路が示されます。しかし本図は、江戸一大坂間も東海道と共に海路が朱線で示されているのです。それも一本の道筋ではなく、いくつかの分岐があり寄港する場所もさまざまなため、参勤交代の経路を示す以外の目的をもって描かれたのだと考えられます。

具体的な年代の記載はありませんが、描かれているものや各城につけられた城主名の付箋によってある程度作られた年代を絞り込むことができます。刈谷城主は「稻垣信濃守」とされ、刈谷藩主稻垣家二代重昭と分かります。隣の西尾城主は、後に刈谷に移る土井家の先祖で「土井式部少輔」とあることから土井利意となります。



江戸より長崎・五島まで海路図の東海地域（当館蔵）



[尾張・参河部分]

こうした信濃守や式部少輔といった城主の通称を見ていくとそれが誰であるかが分かり、彼らがその名乗りであった時期を突き止めていくと、それらの重なる時期が本図の成立年代（もしくはそれに近い時代）ということになります。付箋にある各城主の通称が重なる時期は延宝5・6年（1677・78）と貞享3・4年（1686・87）で、この間がおおよその成立年代と考えられます。また海路図の中では比較的成立が早いもので、刈谷藩主稻垣氏の名が見える資料であるということも本図の特徴として挙げられます。

太平洋側の航路は船仲間と称する同業者組合や菱垣廻船・樽廻船の存在が知られ、大坂から江戸まで荷物を運んでいました。絵図に記される伊勢湾の港の中でも吉田（豊橋）や篠島、熱田、津島、安濃津（津）、鳥羽など朱線でつながれる港はそうした廻船の中継地点として機能していました。

歴史博物館 令和8年度 秋季企画展の案内

「河海を往く—東海の交通・流通と河海—」

時 10月3日(土)～11月15日(日) 内海を往来する人・モノをテーマに企画展を開催します。